
元彼

紀本 真利亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元彼

【Nコード】

N1008L

【作者名】

紀本 真利亜

【あらすじ】

忘れた頃に携帯に掛かってきた電話。それは元彼からだった。

着信

とある、天気の良い平日の昼間。

「ブーツ、ブーツ……」

テーブルに置いておいた、携帯のバイブが、主の私を何処ぞの誰かが呼んでいると告げる。

休日でお気に入りのテレビを見ていた私は、CMになるまで気づかないフリをした。心の中では、きっと職場からだろう、と思っていたのだ。

休日の職場からの電話程、嫌な相手はいない。恋人のいなかった私には、電話の相手が職場である可能性が高かったのだ。

「あー、ウザイ」

そんな言葉を呟きながら、携帯を開いた。

唾を軽く飲み込む自分がいた。身の覚えのある下四桁の番号。元彼からの着信である事はすぐに解った。

約三年振りの連絡。

掛け直そうか悩む。いつの間にかCMが終わっていた事にも気づかなかった。テレビの笑い声も微かに聞こえてはいたが、もう興味はそっちには無かった。

「何だろう？」

最近、独り言もお手のモノになっていた。一人暮らしの私にと

って、それは普通の事だ。

時間にすれば、きつと2、3分の出来事であろう。でも、その間に色んな事を考えたのだ。「結婚することになった」、「よりを戻そう」、「元気?」、とか。

「結婚する事になった」は、わざわざ私に報告する事は無い。とか、そんな類の妄想などを考えたのだ。

冷蔵庫から、冷たい麦茶をコップに注ぎ、半分位飲み干してから私は、着信履歴の一番上にある番号に通話ボタンを押した。

会話

懐かしい曲が耳に流れてくる。

付き合っていた頃に良く聞いていた曲。もう少しでサビという所で、曲は切れ、これもまた懐かしい声が聞こえてきた。

「あ、もしもし、ごめんね、いきなり電話掛けて…」
少し照れながら言う、あの時と同じ声。

「どうしたの？急に。何かあったの？」

あたかも興味の無い様に振舞う私の態度。本当は、「何ですか？！」って、気持ちだけでもその気持ちは押し殺したのだ。捻くれ者のなのだ私は。それでもなければ、きっと私にも今頃、新しい彼氏もいる筈だ。

「いや、別にどうしてるのかなって、元気にしてんのかなって思
って」

この返事のシュミレーションはしていた。さては、私と別れて後悔でもしてるのか、新しい彼女に振られて、元カノの私に寂しく電話掛けてきたのか、きつとその二つの内にどれかだろう、って、私は勝手に決め付けていた。

「別に元気だけど、で、何？」

元彼の腹の内を探ろうとした。

「別に要は無いんだけど、近くに來たから久しぶりに会わないかなって、思っ

あの時と変わらない素直な奴。

私は少し間を空けて考えた。暇だから会っても良かったけど、ちよつと会うのも怖かった。少しでも私の心の中をフラッシュバックしてみたのだ。そして、私の出した答えはこれだった。

「今、ジャージで、素ッピンだから無理！」

「ぶつ、」

確かに笑った元彼。

「別に、ジャージで素ッピンでもいいよ。そんなの何回も見た事あるから」

そりゃ、何回も見た事もあるかも知れないけど、今はそういう問題じゃないでしょ！　って、心の中で思ったのだ。反撃する間もなく元彼は、己の素直な気持ちで言うのだ。

「会うのはどうしても無理？」

どこか切なく、力のない様に聞こえた。

その問いかけに私は、また少し間を空けて、

「なら少しだけならいいよ……」

三年間、私と一緒に暮らしていた元彼。たまにだけ私に見せていた彼の弱い所が私は好きだった。だからその問いかけた言葉に、私の心は無性に会いたくなってしまったのだ。

久しぶりとか関係無しに、共に過ごした三年間。そして別れてからの三年間。同じ三年間でも、気持ちの中では、身の有った三年間の方が強いから、たった三年間会わなかっただけで元彼を他人には出来ない自分がいた。

そして、何よりも、何となくだけど、今の元彼が私を必要として

いると思っ
たのだ。

再会

三十分後に、元彼は迎えに来てくれる事になった。

私は、化粧をして着替えようとしたが、あっという間に三十分が経ち軽い化粧だけで終わってしまった。

「まあ、ちよつと会って話すだけだから」と、思いつつ、ジャージー姿で家を出た。

家の前には、遠い記憶の中にある見慣れた車が止まっていた。意外にもあの時みたいに自然にその元彼の車に乗ることができた。

「本当にジャージーで来たんだね。うける」

あの時と全然変わらないその姿には、正直ビックリしたのと、普通、第一声は「久しぶり」もしくは「綺麗になったね」だって思ったりしたのだ。

「で、なんなの？」

「まあ、ちよつとドライブでもしようよ」

元彼は、そう笑顔で言いながら、ウィンカーも出さずにアクセルを軽く踏んで車を動かした。

「まだこの曲聴いているの？」

車内に流れる、少し前のHIT曲。

「別に良いでしょ、好きなんだから、俺の勝手でしょ」
そんな事を言って、曲に合わせて歌詞を口ずさんだ。

「またいつものが始まったよ」なんて思いながら私は、いつも見慣れている近所の流れる風景を眺めた。

あの時みたいに、それを当たり前の様に聞き入る自分がそこにはいたのだ。

少しの間、会話も無く元彼の歌だけを聴いていた。そして、不思議な事に訳の解らないままに元彼と一緒にいるのに、「何の為にここにいるのだろう」って思うことも無く、とても自然なままに。

二人の車は、静かに家から遠ざかっていった。

行先

ゴールデンウィークも終わった平日の道路は空いていた。車は昔良く通っていた道に出て、早くも無く遅くも無く走り出す。

「ねえ、何処にいくの？」

このまま行くと、街から離れる道なので私は聞いてみた。

「覚えている？あそこの公園」

「公園？」

「そう、湧き水が出てる公園」

私は、初めてデートした場所だとわかったのだが、あえて惚けてみせた。

「あつたつけ？そんな公園？」

「あれ？忘れちゃったの？随分前のことだから仕方ないか」

少しでもテンションの下がった元彼が、少しでも可哀想になったので思い出したフリをした。

「もしかして、びしょ濡れになりながらペットボトルに沢山水を入れた所？！」

「そうそう！そこに行くの」

ちよつと顔の赤い元彼が笑みを見せた。

「何しにいくの？また水でも持ってかえるの？」

「まあ、暇だしそんなところかな」

「結構距離あるよね？マジ行くの？」

ちよつと嫌な顔を私はして見せた。

「今日は道空いているからすぐに着くよ、時間は大丈夫？」

「時間は別に大丈夫だけど、行くなら先に言えよ」

私は、ジャージーなのだ。そんな所に行くのなら、ちゃんと着替えてきたのに。と、心の中で思ったのだ。

「てゆーか、私ジャージー姿何だけど」

「ははっ、大丈夫。今日はきつと誰もいないし、ジャージー似合っているよ」

相変わらずな能天気ぶりは、未だ健在だった事に今私は思い出した。

「何で今更そんな所に行くんだよ、はあ」

思わず溜め息が出た私なんかは無視して、元彼は私の心をホッとさせる笑みを浮かべて、また歌いだした。

とりあえず、行き先は思い出の初デートの場所だった事が、やつと判明したのだ。

豆腐

久しく通るこの道は、あの頃と何も変わらなかった。変わったのは私と隣で運転をする元彼の関係だけ。

「そう言えば、あそこのアイスクリーム食べる？」
何かを思い出したかのように元彼は言った。

「豆腐のアイスクリーム？」

私は、アイスが好きだからその記憶は覚えていた。

「そう、良く覚えていたね、食べる？」

「勿論食べる。おごってね」

私はズルイから奢らせようとした。

「はい、わかったよ」

よし、今日はこれだけでも来たかいがあったと心の中で思っていた。

そして、程なくして、国道沿いにある小さなアイスクリーム屋についたのだ。

私たちは豆腐のアイスクリームを二つ買い、小さなベンチに腰をかけた。

「やっぱり美味しいね、ここのアイス」
一口食べてから元彼はそう言った。

「チョー久しぶりに食べた。美味しい」

私は、自然と笑顔が出ているのも知らずにそう答えていた。

「俺もこれ、あの時以来」

頬を赤らめて元彼は、そんな事を言った。顔が赤いのが気になった私は、

「風邪引いてるの？」

「うん？もしかしたら少し引いているかも」

笑いながら元彼は、またアイスを口にした。

「私にはうつさないでよ！」

そう言っ、私は少しか元彼から距離を置いた。

時間にして言えば、ホンの三十分位で私たちはこの思い出の地となっていた、小さなアイスクリーム屋を後にし、また車を走らしたのだ。

財布

「まだその指輪してんの？」

元彼の左中指の指輪が目に入った。私と付き合っていた時からチヨクチヨクしていた指輪。随分とお気に入りなんだと今日改めて思った。

「これしか持っていないから、財布はお前に買ってくれたのまだ使っているよ」

「マジで?!」

さつきアイスクリーム買ってもらった時、全然気づかなかったからビックリした。

「さつさと変えなよ」

「別に良いじゃん、気に入ってるんだから」

付き合ってから最初に誕生日にプレゼントした財布。かれこれ、何年前か頭の中で計算をしてみた。

「八年前??」

「もうそれ位経つの? 時が経つのは早いね」

のんきにそんな事を言った、意外と物を大事にする元彼。

「お前にも買ってたあげたでしょ、財布」

「もう使っていないよ、今は違うの使っている」

「あ、そっか」

少しだけ寂しげな横顔を元彼はしていた。少しだけ微妙な間が出来てしまった。こんな時に限って車のBGMは、昔HITしていた失恋ソングが流れてきた。空気位読んで欲しいものだ。話題を変え

る為に質問をしてみた。

「彼女は今日仕事？」

「はあ？女なんていないよ、いたらお前とは逢っていないよ」

「いないの？！何で？」

「何でって言われてもいないから仕方無いでしょ」

「さては、捨てられたんでしょ？」

「はいはい」

元彼は、二言の返事で返した。それを聞いて私は、やっぱり寂しくなつて私に連絡してきたんだと思ったのだ。私の読みは流石だと心の中で自分を褒めた。

失恋ソング、失恋ソングの連発を終えた頃、信号手前にあった道路の青看板に、目的地である公園の名前が出てきた。

私と元彼の思い出の地である公園はもうすぐである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1008/>

元彼

2010年11月16日10時52分発行